國語讀本

高等小學校用

卷五

福岡第一師範學校
（學校圖書）

登錄番號 第　號
門 社會科學
部 教育
項 教授法 國語
次 目
冊 全 第冊ノ內
分類番號 第 372.83 號
24586

T1A3
10
Ts21

明治三十三年二十月三日
高等小學校國語科兒童用教科書
文部省檢定濟

文學博士 坪内雄藏著

國語讀本

高等小學校用 卷五

東京 合資會社 冨山房藏版

47705

図書 和図書 遡

a13803288834a

福岡教育大学蔵書

巻五目次

第一課　國體……一
第二課　風俗の變遷……三
第三課　狭穂姫……六
第四課　金剛石……九
第五課　文字の話……十一
第六課　我が國活字の由來（上）……十四
第七課　同　（下）……十六
第八課　むぐらもちと蚯蚓……十八
第九課　むくらもちの裁判……二十
第十課　木内宗五郎……二十三
第十一課　短篇一束（河村瑞軒　不知火）……二十六
第十二課　箱根山……二十八
第十三課　温泉……三十
第十四課　柳子……三十一
第十五課　渡舟……三十三
第十六課　河川……三十四
第十七課　全國大競漕會（書簡）……三十六
第十八課　同　（記事）……三十七
第十九課　蚊……四十
第二十課　自然の音樂……四十二
第廿一課　辻音曲……四十四
第廿二課　丁抹吕……四十五
第廿三課　潮の滿干……四十八
第廿四課　食塩……五十一

國語讀本　高等小學校用　巻五

第一課　國體

我が國の國體と、諸外國の國體とは、全く、其の趣を異にせり。隨うて、我が皇室と、我が臣民との關係は、外國には絶えて無き特例たり。

そもく、我が國は、神代の昔、我が皇室の御遠祖が、世に、天孫人種と稱し奉る御一族を率ゐて、降臨あらせられし時を以て、開國

注意　米將　狹穂　斯波字　特シタル　熟語ノ外ニ　說明テ　置スベキ　語句アル　語ニ附　シタリ　最後之　レニ句ヲ　米

米　米　降臨

端緒

の端緒となす。おもふに、其の頃の御一族は、さながら、大なる一家族の如く、御本家の長者たる御神は、取りも直さず、全族の長者にておはしましき。即ち、主從の關係は、本家、分家の關係に外ならざりしなり。

かくて、天孫人種、次第に增加するにつれて、上下、主從の差別、追々明かになり來りしかど、國家と名づくべき程の組織は、尚ほ、設けらるゝに至らざりき。

眞の建國の礎は、今より二千五百餘年の

將卒

昔、神武天皇が、天祖天照大神の御遺訓に基きて、東征の途に上らせられ、全國を平定せさせたまひし時に、始めて定まりぬ。それより、御本家たる皇室は、此の國に君臨あらせられて、萬世一系の基を開きたまひ、御分家の子孫たる諸將卒の一族は、臣民となりて、國内に充ちひろがり、異族、次第に歸服し、遂に、儼然たる帝國組織成るに至れり。

然れども、此の臣民と君主との關係は、もと、本家と分家との關係より起こりたるも

のに外ならねば、其の情實、大いに、諸外國と異なるものあり。　されば、また、世々の天皇の、臣民を愛撫せさせたまふこと、眞に、子の如く、臣民の、皇室を敬慕し奉ること、また、眞に、父の如し。　君臣の間に、禮義あるのみならず、親子の恩愛あり、至情あり。　古來我が國の、一度も、外國の侮りを受けたることなきは、主として、此の、君民協和、上下一致の、絶好なる國風に基けるなり。　我等臣民は、つとめて、此の國體の美を發揮すべきなり。

愛撫　敬慕　侮　發揮

簡易　質樸

第二課　風俗の變遷

太古は、何事も、簡易質樸にて、衣食住の如きも、後世とは甚だ異なり。　我が國人も、今より數千年の昔には、穴を掘り穿ちて、居り、棚の如きものをしつらひて、住み、木の實を採りて、常の食となし、獸の皮を剥ぎて、衣服となせりき。

神武天皇の御時以後、木の皮、草の皮などを紡ぎて、布を織り出だすこと行はれたり。

左衽　袴

その頃の服装は、略、こゝに畫けるが如し。襟は、すべて左衽にして、筒袖の上着をつけ、袴に似たるものをはき、頸、腕などには、曲玉、管玉などを纏ひ、腰には、長き劔を帶べり。顔を蔽ふ物を用ふる外には、女の服も、男のと大差なかりしが如し。

三韓との交通開くるに及びて、かなたの織工渡來し、養蠶の業も進み、絹物多く織り出だされたり。其の衣服の仕立方も、追々に、韓土の風となりぬ。

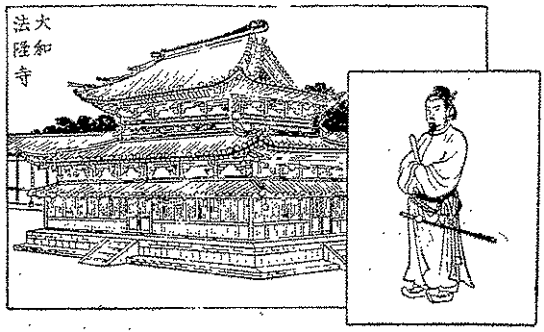
桁　葺

家屋の建築法も亦た世と共に移りゆけり。神武天皇の橿原の宮は、石を礎にして、柱を立て、梁をあげ、桁をかけ、藤葛にてしばり、萱にて、屋根を葺きたるに過ぎざりしが、三韓との交通以後は、かなたの進歩せる建築法採用せられたり。かくて、欽明天皇の御代には、唐より、佛教傳來し、それと共に、印度の造寺法傳はり、桓武天皇、都を、京都に遷

※倣

し、唐制の宮殿を營み給ひてよりは、上流の住家は、大方、唐の風となりぬ。　この頃の建築にして、千數百年の風雨に堪へて、今尚ほ殘れるものあり、大和の法隆寺などの如きは、これなり。

その頃より、衣服の仕立も、唐に倣ひて、ゆるやかになり、上着の筒袖も、廣く、且つ長くなりぬ、禮



※　※　※　※　※

服の如きは、殊に著し。　十二一重などいふ女服の出來しも此の時代の末也。　貴人の服飾の、優美にして高雅なること、内裏雛そのまゝなりき。

藤原氏の文弱時代去り、源氏の武强時代來るに及びて、華奢の風はすたれたり。　武者繪に見る義經、辨慶などの甲冑姿は、實に、その頃の軍服にして、賴朝の着たる狩衣、蘇

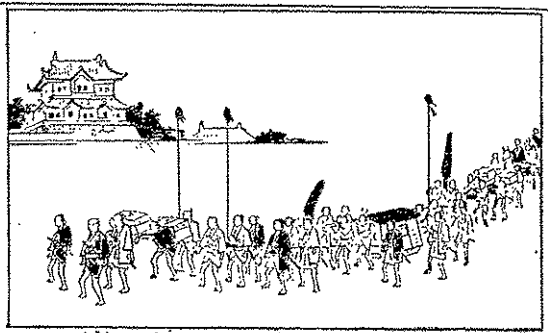
冠

我兄弟の冠れる烏帽子なども、常に見る服裝なりき。要するに、衣服も、家屋も、便利と質素とを旨としたるもの、上中下に通じて行はれたり。

泰平狀態

その後、長き間の戰亂を經て、德川時代に至り、天下泰平となり、生活の狀態一變せしかば、風俗も亦た改まりぬ。今日用ふる服裝、羽織、袴の如きは、すべて、德川時代に始

塗籠



まりたるものなり。瓦葺、板葺、土藏造、などの廣く行はれたるも、この頃よりなり。

かくて、維新前までは、著き變遷もなかりしが、歐米との交通開けてより、制度大いに改まり、風俗また一變せり。帶刀先づ禁ぜられ、斬髪ついで奬勵せられ、烏帽子、笠は廢せられて、帽子、之れに代り、祭

祭典　典の外は、大小の禮服、大方、洋風に改められ
刷新　たり。其の他の面目の刷新、一々擧げて言
ふべからず。

家屋も亦た、舊觀を改めたり。就中、官省、
學校、製造所などにして、西洋造ならざるは
殆ど無し。要するに、便利、衛生、堅牢を重ん
堅牢　ずる風は、日に月に盛んならんとす。

第三課　狹穗姫

垂仁帝の皇后に

狹穗姫といふがおはしけり。
御兄君の狹穗彦が、
非道の命をこばみかね、
帝を弑し、我れもまた、
死なんと、覺悟せられけり。
かくとも、しろしめさざれば、
けふも、龍顏うるはしく、
帝は、后の御膝を、
かりの枕に、しばらくは、
うたゝねの夢に入りたまふ。

膝枕

＊　双　＊　＊

「兄のいひつけ今こそ。」と、
狭穂姫、懐剣取りいだし、
ぬきはなさんとなしつゝも、
御顔見れば、今更に、
胸ぞふさがる。「天恩は、
山にも、海にも比しがたし。
日月とも見る御方に、
なびて、双のあてられん。
さりとて、事のありよーを
明さば、兄の命なし。

＊　聯　凶　＊

兄もいとをし、何とせん。」
おとす涙の、はら〳〵と、
龍顔うるほし、覺めたまふ。
「朕は、不思議の夢を見たり。
錦の小へび、首にまとひ、
打つ雨、顔をうるほしぬ。
凶か、吉か。」とのたまへば、
皇后、つひに、つゝみかねぬ、
一部始終をあかしつゝ、
我が身にかへて、兄君の

助命をなげき乞はれけり。
天下の大事に關すれば、
帝きゝいれたまはずて、
兵士を送り、狹穗彦が
稻城を圍ませ、討たせらる。
「惡人なりとて、兄君を、
我が口ゆゑに、殺させて、
など、よそに見ん。我れも共に、
城にこもりて、命乞ひ、
叶はずば、共に死ぬべし。」と、

踏　輝

后は、皇子をかきいだき、
しのびて、稻城に入りたまふ。
かゝればとても、朝敵の
赦されつべきはずもなし。
官軍、次第に攻め寄せて、
稻城に、火をぞかけてける。
忠と悌との二道を、
踏みわけかねて、皇后は、
皇子を、城よりいだしつゝ、
帝のもとにおくらせて、

其の身は、兄君もろともに、
炎のうちに、うせたまふ、
あはれなりける次第なり。

第四課　金剛石

鑛物中、世ニ貴重セラル、コトノ甚シキハ、金剛石ナリ。其ノ光輝、アラユル寶石ニマサリ、硬キコト亦タ、萬物ニ冠タリ。且ツ、産出額、甚ダ乏シケレバ、其ノ價、極メテ貴シ。豆粒大ナルモ、數百金ニ値ス。其ノ大ナル

硬　値

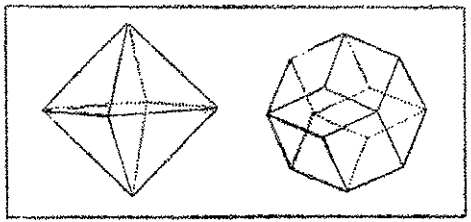
モノニ至リテハ、一定ノ價格ナシ。

金剛石ハ、概ネ、純粹ノ炭素ヨリ成ル。通常ノ火ニテハ、燃エザレド、酸素中ニテ、高ク熱スレバ、燃エツキテ、只、イサヽカノ灰ヲ遺スノミ、通例ハ、八面躰、或ハ菱狀十二面躰ニ結晶シ、其ノ面ハ、概シテ、彎狀ニ隆起セリ。無色ヲ常トスレド、又、淡キ黃褐色、青、綠、紅等ノ種々アリ。總シテ、些ノ瑕ナク、斑點ナキヲ最トシ、色ハ、薔薇色ヲ珍トス。

金剛石ハ、鋭ク、光線ヲ屈折シ、光澤、甚ダ多

純粹　菱　結晶　彎　褐色　瑕

燦爛　粧飾　磨屑　琢磨



シ。故ニ、之レヲ磨ケバ、光輝燦爛トシテ、人目ヲ射ル、且ツ、晝間、光線ヲ吸收シテ、夜間ニモ、光ヲ發ス　粧飾用ニ、貴重セラルヽ所以ナリ。

金剛石ハ、ソノ磨屑スラモ、裝飾ニ利用セラレ、ソノ質ノ劣等ナルモノモ、硝子切、又ハ、鑛山ノ岩ヲ穿ツ器械ノ尖端ニ用ヒラル。琢磨ノ料トシテモ、ソノ用廣シ。

※

金剛石ノ產地ハ、印度、ぶらじるヲ、最モ古シトス。今ハ、南部亞弗利加、かりふぉるにや、ぉーすとれりや等ヨリ、多ク出ヅ。河流ノ砂礫中ニ見出ダスヲ通例トスレド、或ハ、火山岩中ニモ發見ス。

現今、世界ニテ、最モ名高キ金剛石ハ、英國ノ王室ニ屬スルモノナリ。其ノ重量五匁六分ニ餘レリ。更ニ大ナルハ、露國皇室ノ所有ニシテ、其ノ重量十匁六分餘アリト。近年、南部亞弗利加ニテ、發見セルモノハ、重

量四十九匁六分餘ニシテ、直徑凡ソ三寸、其ノ價額四百八十万圓餘ナリト云フ。

化學者ガ、多年ノ研究ノ効アラハレ、近時ハ、人工ニテ、金剛石ヲ作ルニ至リタレド、未ダ、大ナルモノヲ得ル能ハズ、且ツ、勞ト報ト相償ハザルガ故ニ、今ハ、尚ホ、學術上ノ實驗タルニ止マル、トイフ。

第五課　文字の話

文字は、人の思ふことを書き記す、一種の符牒なり。文字あるが故に、人は遠方に在る者とも、通信し、後世へも、思想を傳ふることを得。文字あればこそ、數千年前の事をも知りて、今の經驗に照らし、知識をひろむることをも得るなれ。文字なかりせば、人と禽獸と、甚しく異なることなかりしならん。文字は、文明の要具なり。

太古の世には、樣々の形に、繩を結びて、約束のしるしとなしゝこともあり。今も、野蠻の國にては、それに類することを行ふもあれど、そは、未だ、文字とは名づくべからず。文字は、物に書き記せるものに限る。

文字の始めは、繪なり。支那の古代の文字、埃及の繪文字などを見ても知るべし。然るに、人智進むにつれて、繪は、繪として發達し、文字は、文字として發達し、遂に、今用ふる如き、諸種の文字とはなれるなり。

文字の種類は多けれど、古來最も廣く行はれたるは、三種のみ。象字と、意字と、音字となり。象字とは、物の象より思ひつきたるにて、繪に似たり。支那、埃及の太古の文字、是れなり。⊙は日の形なり、◐は月の形なり、山、川は、山の形、川の形に似せて書きたるなり。

日、月、山、川の如き、形あるものは、象字に表はすことを得べけれど、右、左、上、下などいふ如き、形なきものに至りては、如何にすべき。

上ノ事
下ノ事

是に於て、意字とて、符號にて、意味をあらはす法起こりぬ。たとへば、一線を引きて、平面の符號とし、その上に、一點を附しては、上といふことの符號とし、其の下に、一點を附しては、下といふことの符號とするが如し。數字の如きも、一種の符號字なり。

次に、音字といふものあり。こは、字の、最も進歩したるものなり。專ら、音聲に基きて、作れり。いろは四十八字の如き、西洋のABC文字の如き、是れなり。

刊行

要するに、文字は、形の簡略にして、思想をあらはす力の自由なるものを、最上とすべきなり。此の標準よりいへば、音字に優るものなく、音字中に於ては、印度文字、希臘文字、羅馬文字などを、比較上優等とす。

第六課　我が國の活字版の由來(上)

我が國に、活字といふもの出來て、著述刊行上に、大なる便益を與へしは、今を去ること卅年ほど前かたよりなり。活字を創め

通譯　閱讀　探索

しは、本木昌造といふ人なり。

本木昌造は、文政七年、長崎新大工町に生れき。代々、幕府に仕へて、和蘭語の通譯官たりしが、廣く西洋の事情を調べ、多く、かなたの書を閲讀するにつれて、其の印刷術の精巧なるに感じ、かくの如き術を、我が國にも興したし、と思ひたち、それより、種々、工夫を凝らしたり。或は、其の理を、洋籍に探り、或は、その術を、西洋人に質しき。

嘉永五年、始めて、「流し込み活字」といへる

獄

を製して、自著「和蘭通譯記」を印刷しき。是れ、實に、我が國鉛製活字版の根元なり。

安政二年、故ありて、獄に下されけるが、常に、默坐して、沈思し、自ら製りし活字版の改善を工夫するの外、餘念なかりき。

其の赦さるゝに及びてや、或は、文字を、水牛に彫りて、鉛に打ち込み、或は、鋼鐵に刻して、銅に打ち込むなど、さまざまの工夫を凝らしき。されど、改善の功擧らざりしかば、暫く、念を、印刷業に絶ちけり。

萬延元年、蒸汽船二隻を、外國より買ひうけ、自ら、其の船長となりて、新事業に着手せり。　これより、或は、幕府の命を奉じ、將軍家茂公を載せて、紀州加太浦に、砲臺を巡視せしこともあり、或は、はやてに吹き流されて、八丈島漂流の難にあひしこともありき。

王政維新の際には、飽浦製鐵所に入りて、製鐵の事を掌り、明治二年には、長崎に、私塾を開きしが、月謝も塾費も、すべて、徵收せぬ定めなりしかば、年々の失費、千圓以上に及

私塾

びぬ。　是に於て、維持費を求むるの必要生じ、再び、印刷事業に、心を傾くるに至りき。

偶　秘

第七課　我が國活字版の由來(下)

かくて、資金五萬圓を投じて、活字改善業に、心を碎く折しも、偶〻米國人某が、清國上海にて、巧妙なる鉛版活字を製出せし由を聞き込みければ、急ぎ、人を遣りて、視察せしめき。　されど、彼れ、深く、其の術を秘して、知らしめざりき。　恰も好し、文學博士重野安繹、

藏版

紹介

招聘

上海（シャンハイ）より、件の活字と、其の印刷器械とを買ひ來りて、藏せり、と聞こえしかば、更に、人を介して、申込みし末、遂に、之れを讓り受けき。

さて、昌造は、之れを、活字改善の標本とはしたりしかど、尚ほ、意に滿たぬ所多かりければ、米國の宣教師フルベッキに謀り、其の紹介にて、上海なる活版技師を招聘して、師となし、活版傳習所といふを設け、活字製造、及び、電氣版印刷の業を創めき。是れ、實に、我が國活字印刷術完成の端緒なりき。

※

託

昌造は、一は、此の業によりて、窮士族に、產を授けんと欲せしなり。されど、いろ〳〵の困難生じて、事、意の如く運ばざりしかば、長崎の活版所は、後ち、之れを、門人某に託しぬ。技術の進歩、爾來、大いに見るべきものありき。

この年、横濱に、毎日新聞發刊の擧ありしが、昌造、之れに與り、社員を送りて、同地に、活版工場を起こし、新聞印刷に從事せしめき。毎日新聞は、我が國新聞紙の始めなり。

*

監理

事業の、漸く、成功の域に進むや、更に、門人を、東京に出だして、印刷局設立の議に、與らしめ、且つ、下谷泉町に、分工場を開かしめしが、後ち、築地二丁目に移しぬ。今の築地活版所は、是れなり。

昌造は、かくても、休息することなく、自ら、工場の監理に勵精するは勿論、人を督して、活版材料の改善に、心を勞すること、十年一日の如くなりき。天草島にアンチモニーの採掘を企てしなど、其の一例なり。

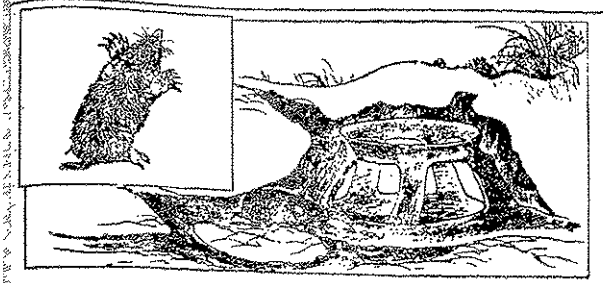
享年

昌造は、明治七年、鄕里にてみまかりぬ。享年五十三なりき。

第八課　むぐらもちトみゝず

絨毛　覆

むぐらもちハ、土中ニ棲ム獸ナリ。躰ノ長サ五六寸ニシテ、全身、黑キ絨毛ニ覆ハレ、前後ニ、四肢アリ。前肢ハ、强ク、大ニシテ、後ロヘ曲ガリ、爪ハ、平タクシテ、長ク、スルドシ。後肢ハ、前肢ヨリモ稍長ク、其ノ爪ハ、短小ナリ。



此ノ獸、危險少ナキ、軟キ地ヲ擇ビテ、ソコニ、長キ壁道ヲ穿チ、其ノ中央ニ、大ナル凹ミヲ設ケテ、木ノ葉、枯レ草ナドヲ敷キ、之レヲ、其ノ巣トナス。且ツ、左ト右トニ、若干ノ岐道ヲモ掘リ穿チテ、往來ヲ便ニシ、敵來レバ、自在ニ遁逃ス。

此ノ獸ノ眼ハ、殆ド、其ノ用ヲ爲サズ。サレバ、食ヲ求ムルヤ、常ニ、鼻ヲ以テシ、不慮ノ變ヲ知ルヤ、耳ヲ以テス。

むぐらもちハみゝず、又ハ、昆蟲類ヲ、常ノ食トス。夏ハ、昆蟲類、地面ニ出ヅ、故ニ、此ノ獸モ亦タ、之レヲ捕ラントテ、地面近ク出デ來ル。畑地ハ、軟カニシテ、穿チ易ケレバ、屢〻此ノ獸ノ爲メニ、掘リカヘサレテ、作物ヲ害セラル。冬ハ、地中深ク潛伏シテ、休眠ス。

みゝずハ、其ノ形、ゴムノ管ノ如ク、目モナク、耳モナク、鼻モナク、足モナシ。動物學ノ

書ニヨレバ、此レニ、甲乙ノ二種アリ、トゾ。甲種ハ、緑色ニシテ、長サハ、二三寸ヨリ、二尺餘ニ及ブ。乙種ハ、其ノ色赤クシテ、長サ、大抵、四五寸ヲ極トナス。

みゝずハ、環節動物ニ屬ス。六十乃至二百餘ノ、環ノ形シタル節ヨリ成リテ、一體ニ、薄キ皮ヲ被レリ。又、節毎ニ、其ノ周圍ニ、鬚シキ、細キ粗キ毛ヲ具フ。足ナクシテ、歩クハ、之レアルガ爲メナリ。

通例、水ノ底、又ハ、濕ヘル塵塚ナドノ底ニ棲ム。概ネ、土中ノ有機物ヲ食ヒ、時トシテハ、草ノ根ナドノ柔ナルヲ食フ。冬トナレバ、水ノ葉、草ノ根ナドニテ、穴ノ入リ口ヲ塞ギ、巧ミニ、寒氣、乃至、乾燥等ヲ防グ。

みゝずハ、其ノ體質脆弱ニテ、防禦ノ具備ハラサルガ故ニ、他動物ノ襲來ヲ恐レテ、晝ハ、土中ニ潛ミ、夜ニ入リテ、這ヒ出デテ、食ヲ索ム。ソノ食ヲ索ムルヤ、專ラ、觸感ニ依ル。

塵塚　脆弱　這

第九課　むぐらもちの裁判

＊　＊　＊

米國の政事家、法律家として名高き、ダンエルウ、ブスターが、尚ほ幼なかりし頃の事なり、兄某が、一疋のむぐらもちを捕へて、殺さんとしけるを見て、憫れに思ひ、「善惡の辨へなき獸を殺さんはむごし、命は助けて放ちたまへ。」といふ。兄曰はく、「然らず、こやつは、屢、我が家の畑を荒し、作物を害せり。今殺さずば、また、更に、同樣の害惡を重ぬべし。」と。ダンエル、かさねて曰はく、「兄上よ、世に生きとし生けるもの、物食はでは、生活する

＊　＊　＊

能はず。兄上がいはるゝ害惡も、彼れに取りては、食を得んゝ爲めの、止むを得ざる働きのみ。よしや、眞に、惡事なりとも、死に當るほどの罪にはあらじ。」と。

兄弟の押問答は、父の耳に入りぬ。父は、兄弟に向ひ、「雙方とも、言ふことに一理あり。我れ、裁判官とならん。兄は原告なり、ダンエルは辯護士なり。むぐらもちを被告として、こゝに、公判を開くべし。原告たる兄の申立はいかに。先づ、それを聽かん。」といふ。

辯護士

閣下　畑　蒔　剰　狡猾

兄、父上よ、否、判事閣下よ。　被告は、土中に棲息するを天分とす。　然るに、彼れ、時々は、地上に出で來り、其の際、田畑の土を浮かせ、蒔きたる種を覆し、作物の根を緩め、甚しきに至りては、之れを食ふ。　農事を害すること甚し。　この間も、わが父の畑を穿ちて、蜂の巣の如くし、剰へ、馬鈴薯の大なるを擇び食へり。　こやつの如きを助けおかば、今後の害は、一倍たるべし。　且つ、經驗によりて、狡猾の度を加ふべければ、再び捕ふること

後患　辯舌滔々　寛仁　＊　＊

困難ならん。　須らく、今殺して、後患なからしむべきなり。　又、一つには、せめてもの償ひに、其の皮を剥ぎて、何かの料とせん。」

辯舌よどまず、滔々と述べければ、父の判事も、感心したる躰なりき。　其の時、ダンエルは、徐ろに口を開き、「寛仁なる判事閣下よ、願はくは、先づ、被告が、現境に陷りたる原因を察せられたし。彼等とても、有情の動物なり、天地間に生れ出でし上は、生を保つの天權を有すべき道理なり。　且つや、彼等は、虎

狼などの如き、殘害の動物にあらず、生活せしめんに、何ほどの害かあらん。原告は、害、害と叫べども、被告が、生を保つ必要上より食ひしは、僅かに、物の根のみ、菜根、草根のみ。人間に取りて、幾許の害ぞ。彼れとて、惡と知りてなしゝにあらず、性に隨ひて、しかせしのみ。惡と知りて、惡をなしゝものこそ惡むべけれ。性に隨ふものを罰すべけんや。人は、萬物の長ならずや。かばかりの自由を、下等動物に惜みて、其の生をすら奪

※

※至誠

はんとするか。賢明なる判事閣下よ、被告の情狀を察せられて、慈悲の判決を賜へ。」と、至誠、面に溢れ、慨然として、述べけり。

辯護の半ばより、判事の目は潤ひぬ。ダンエル、述べ了りて、父の面を見上ぐれば、父は、涙を落しつゝ、辭さへもふるひて言ひき、「兄よ、むぐらもちを放て、放て。」と。こは、下等の動物にまで、博く慈悲の心をかけよとの敎にて、人生に害あるものをも殺すべからずとの意にはあらずと知るべし。

第十課　木内宗五郎

下總の國佐倉の藩主、堀田正信が、德川幕府の大政に參與して、江戸にありける頃、藩の奸臣等、苛税を取りたてゝ、私利を營みければ、管下の農民等大いに困窮し、父母妻子をすら養ひかぬるもの多かりけり。村々の總代、見るに忍びずして、或は、郡の役人に哀訴し、或は、國家老に歎願しけれども、聊も、採用せられざりき。

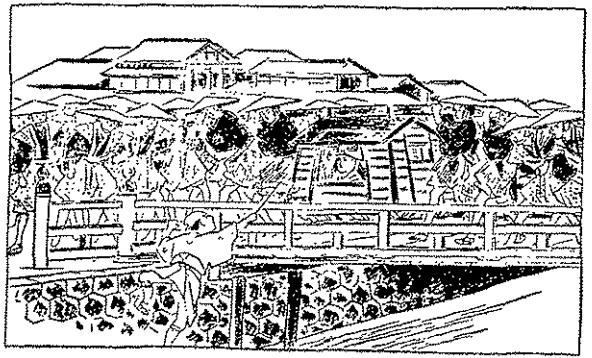
苛税　哀訴

遂に、承應三年十月に至りて、三百八十九箇村の總代一同、公津村といふ村に會合して、藩主に直訴せんことを議しけり。就中、當村の總代木内宗五郎、最も熱心に、此の擧を賛し、これこそは、最後の手段なれば、めいめい、死を決して、事に當るべし、未練の振舞あるべからず。とて、其の出立に際しては、妻子親族と、水盃を酌みかはしき。

酌

かくて、三百八十九箇村の總代等、各〻手分して、江戸に出で、正信の邸に參りて、願意を

陳　※　奮然



陳じけるが、かくても、聽かるゝ色なかりしかば、此の上は、とて、時の老中に訴へ出でき。然れども、これ亦た、空しく却下せられければ、一同、策盡きて、落膽し、相見て、歎息するばかりなりき。

此の時、宗五郎、奮然として、いふ樣、「かゝる有樣にて、何の面目ありて、おめ〳〵、本國に歸らるべき。われは、命を棄てゝも、三百八十九人に代りて、本望を達せんと欲す。諸君は、悉く、國に歸られよ、我れ尚ほ一策あれば、之れを試みんと思ふなり」といふ。一同、その意に隨ひけり。

其の年、十二月二十日、時の將軍家綱、東叡山寛永寺に參詣ありき。宗五郎、只一人、其の通路の橋下に伏して、將軍の來らるゝを待ち、突然、橋下より、青竹に挿みたる願書を

訴訟 狼藉

呈して、「下總印幡郡佐倉の領民、御訴訟申し奉る。」と呼ばはりぬ。「それ、狼藉者よ。」と、從者等、立ち騷ぎて、取り押へけるが、訴狀は、幸ひにして、將軍の手に入りけり。

將軍に直訴するものは、死を以て罰せられし當時に、かゝる大膽の振舞をなす宗五郎が愛鄉の熱誠、感ずべきにあらずや。

將軍、後日、此の願書の趣意につきて、上使を遣はし、一々、正信に尋問せられければ、正信、始めて、藩臣の邪曲を知り、驚き、急ぎ呼び

紛議 讒言 磔刑 稅率苛政 安堵

出だして、取り糾しけるに、彼等は、巧みに、其の非を掩ひ、罪を、悉く、宗五郎に歸して、讒言しければ、正信、之れを信じ、宗五郎夫婦を捕へて、磔刑に處し、其の子四人をも斬りけり。但し、此の時より、稅率は、舊に復し、苛政、次第に除かれければ、農民、漸く安堵するを得き。是れ、皆、宗五郎が、熱誠の功なりけり。

後年、宗五郎の罪なき由知られければ、正信、深く悔いて、其の死を憫み、禮を厚うして宗五郎夫婦の靈を祀りき。今の佐倉町な

る宗吾神社は、即ち、是れなり。

第十一課　短篇一束

河村瑞軒

棟瓦　簷

芝増上寺の棟瓦、一枚破損して、修繕を要しけれど、簷高くして、梯子及ばず、人々、思案に暮れ居たり。その時、河村瑞軒といふ人、指圖して、紙鳶を揚げしめ、それが、堂の屋根を越ゆるに及びて、地に落し、その絲に、綱梯子をゆひつけ、さて、かなたより引かしめけ

※　陰暦　晦　幽

れば、やがて、梯子はかゝりき。

不知火

筑紫の海に、不知火といふあり。陰暦七月晦日の夜、肥後の八代より、船に乘りて、見に行く。ふけゆくまゝに、遙か沖の方に、赤き色の火一つ見ゆ。暫くして、その火、左右に分かれて、三つとなり、四つとなり、見るが中に、海上四五里の間、數知らぬ程に連る。明かなるあり、幽かなるあり。消ゆる、燃ゆる、高き、低き、變化極りなく、燦爛として、目を

射る。學者の研究によれば、こは、海中燐火の一種なりとぞ。

ニュートンの放心

理學者ニュートン、學に專念なるの餘り、食事を忘るゝこと屢〻ありき。賄の老女、之れをうれひて、一日、鷄卵幾個かを、鍋と共に、書齋に運びて、都合よき時、自身にて、半熟にしてめせ。四五分煮たまはばよろし」など、懇に言ひのこして、去りぬ。さて、やゝ程たちて、又ゆきて見しに、今やうくに、食膳につきたるところなり。鍋は、爐にかけられたれど、目をば、書籍よりはなさずして、食ひつゝも、尚ほ、讀める躰なり。只、いつまでも、左の手に、鷄卵をさゝげたるが、いぶかしさに、よく見れば、こはいかに、取りちがへて、懷中時計を煮るなりけり。

第十二課　箱根山

箱根山は、相模、駿河、伊豆の三國に跨れる群山の總稱なり。死火山にして、溫泉の名

所なり。

釋山中の最も高きものは、神山、駒が嶽等にして、山腹、處々の岩間より、硫黄の烟を噴出す。大地獄、小地獄など呼べる處あり、噴火の遺蹟なり。

硫黄

蘆の湖は、駒が嶽の南腹に在り、周回四里餘、水清く澄みて、風景佳し。其の水、流れ出でて、早川となり、仙石原、宮城野等の間を走りて、小田原の南に出で、遂に海に注ぐ。

澄

箱根山中の温泉は、古くより知られたり。

箱根山

早川に沿ひて、上るときは、釋山の間、處々に、温泉場を見る。湯本、塔の澤、堂が島、宮の下、底倉、木賀、蘆の湯、これを、箱根の七湯と稱す。其の他、湯の花澤、姥子、小涌谷、仙石等の新温泉あり。大抵、硫黄、鐵、鹽等の鑛質を含有す。

幽邃　雜沓　南畔　崛起

この地は、東京、横濱に近くして、幽邃なる山水の景に富む。地高く、氣清ければ、避暑によろしく、遊覽によろし。四時、浴客絶ゆることなし、就中、夏時、最も雜沓す。住民は、主として、溫泉によりて生活す。

箱根離宮は、蘆の湖の南畔にあり。東方に崛起せるを、駒が嶽とし、西に當る一村を箱根宿とす。西方には、遙かに、富士山を望むべし。其の影、間〻湖面に映ず、之れを「箱根の逆富士」と稱す、山中の一奇觀なり。離宮の北にある箱根神社は、名高き古祠なり。

箱根峠は、昔は、東海道第一の難所と稱せられき。上下八里にして、路は、頗る峻嶮なり。徳川氏は、之れを以て、東海道の關門となし、所謂箱根の關所を設けて、行人を點檢しき。其の舊蹟、今も尚ほ殘れり。

第十三課　溫泉

地中より、自然に湧き出づる水を、泉といふ。泉には、冷かなると、熱きとあり。

泉の溫度、常の水に越ゆるを、溫泉といふ。泉の熱きは、水の地中にある時、地熱に溫められるゝが故なり。隨うて、其の湧き出づる處は、概ね、火山に近し。

我が國の溫泉にて、名高きは、相模の箱根、伊豆の熱海、上野の伊香保、草津、攝津の有馬、伊豫の道後等なり。其の他の小溫泉は、枚擧に遑あらず。

溫泉には、味の鹹きものあれば、澁きもあり。色の濁りて、且つ、臭きもあり。其の水

※遑　鹹

分中に含める物質の同じからざるが爲めなり。所謂物質とは、主として、鹽分、鐵分、硫黃分等をいふ。

箱根の溫泉は、皆清く澄みて、大概、臭なくほとんど、通常の白湯に異なることなけれど、蘆の湯には、臭氣あり。熱海のは鹹し。伊香保、有馬の溫泉の如きは、色濁りて、白布を浸せば、之れを、茶褐色に染む。蓋し、其の鹹きものは、水分中に、鹽分を含み、濁りて、臭きは、硫黃分を含めるなり。白布を、茶褐色

裨益　高燥　磅礴

に染むるは、鐵分を含めるが爲めなり。

溫泉の、人間の健康に裨益するは、其の含有せる物質が、人身に効驗あるが故のみにあらず、地の高燥、境の閑靜、空氣の清潔など、皆、與りて、力あるなり。

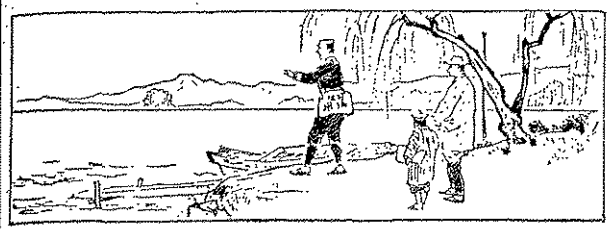
第十四課　獅子

獅子ハ、猫屬ノ獸ナリ、虎、豹ナドト、類ヲ同ジウス。其ノ大サハ、高サ三四尺ヲ並トシ、長サハ、大抵六七尺ニ及ブ。面貌ハ猛ク逞

墻壁　躍　遭　俚諺

ヲ襲フコトアリ。數尺ノ墻壁ヲモ、獲物ヲ咬ヘシマヽ、躍リ越ユトイフ。饑ウレバ、尾ニテ、腹ヲ打チ、鬣ヲフルヒテ、怖ロシキ形相ヲ顯ハセド、食ニ飽キタル時ハ、敢テ、生物ヲ害セズ。人、之レニ遭フモ、害ヲ加ヘズ、熟視シテ、アトスザリシ、終ニ、疾風ノ如ク、逃ゲ去ルトイフ。

英國ノ俚諺ニ、「獅子ハ、兎ヲ斃スニモ、象ヲ斃スベキ力ヲ以テス。」ト。其ノ、何事ニモ、全力ヲ盡スヲイヘルナリ。



第十五課　渡舟

しだれ柳の影ひたす、
村と村とのさかひ川、
波があや織る土手ぎはに、
けふも、人待つ渡守。

雨の日、風の夜、朝夕に、
渡呼びつゝ来る人は、
旅あきうどや、村の爺、
町の女房、役場員。

吼　猛　岩窟

シクシテ躰ニ比スレバ、頭大キク、其ノ歩ミカタニ威厳アリ。高ク吼ユル時ハ、萬獣怖レ伏ス。故ニ、昔ヨリ、獣類ノ王ト稱ス。

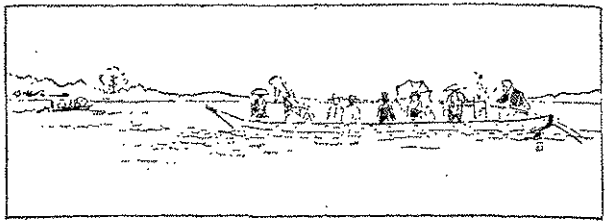
牡ニハ、鬣アリ、毛ハ、滑カニシテ、黄褐色ヲ帯ブ。舌ハ、其ノ表面、ワサビオロシニ似タレバ、獲物ヲ食フトキ、骨邊ノ肉ヲ剥グニ便ナリ。

獅子ハ、猛烈ナレドモ、亦タ、頗ル小心ナリ。晝ハ、穴ニ潜ミ、暮ルヽヲ待チテ、山野ヲサマヨフ。マヅ、池沼ノ邊リニ行キ、樹林、岩窟、草

茅ナドノ間ニ伏シテ、種々ノ獸類ノ、水ヲ飲マントシテ來ルヲ待ツ。動物來レバ、後ロヨリ、徐ニ這ヒ寄リ、前肢ヲ擧ゲテ、不意ニ飛ビカヽリテ、擊チ斃ス、恰モ、猫ノ、鼠ヲ襲フガ如シ。過チテ、獲物ヲ取リ逃ガスモ、決シテ、遠ク追フコトナク、更ニ伏シテ、他ノ獸ヲ待ツ。

終日、餌ヲ得ズシテ、饑ニ堪ヘ難キ時ハ、人家ニ近ヅキテ、家畜

紳士　駄馬



竿かたげたる魚釣や、
獵犬つれし若紳士、
西國巡禮角へ獅子、
郵便配達、小荷駄馬。

なりも、言葉も、いろ〳〵が、
しばし乘り合ふ舟の中、
知るも、知らぬも、知りあうて、
語る間もなく、向う岸。

思ひ〳〵におりたちて、
西へ、東へ、わかれ行く。

ゆくを送れば、又来る、
相手は、日々にかはれども、
　かはらぬ流れ、ぬしひとり、
岸の青柳、水の月、
波間の島もなじみにて、
春秋いくつ重ぬらん。

第十六課　河　川

空中に浮びたゞよへる水蒸氣、熱を失うて、凝縮すれば、雨となり、雪となり、霰となり、雹となる。地上に見ゆる諸種の水は、すべて、之れに原因す。河水の元をなせる泉、湖の水も、その源は、遠く、之れにあり。

ひとしく、河といふも、其の成立ち種々なり。常は、水なくして、底を露はせるもあり。水の、僅かに、河心を流るゝもあり。水の、常に漫々たるもあり。

我が國にて、最も長大なるものは、北海道の石狩川なり。其の長さ、凡そ百六十七里といふ。次は、信濃の信濃川にして、其の長

灌　杏

さ百里餘なり、といふ。其の次は、陸中の北上川にして、其の長さ七十六里餘と稱せらる。其の他、最上川、天龍川、水曾川、阿武隈川、利根川、筑後川など、皆、著名の大河なり。

河の効用は、甚だ大なり。彼の通運を便にして、生活上に、大利を供するも、河の力なり。自在に、田に灌ぎて、乾濕よろしきを得しむるも河の力なり。其の水力を用ひては或は、水車を動かして、米を舂かしむべく、或は器械を運轉して、電氣を起こさしむべし。

藻

河の産する所の物、亦た、大いに、人畜を裨益す。藻は、刈りて、肥料となすべく、魚介は、捕りて、食品に供すべし。又、河の水は、飲料にも供せられ、時としては、氣候を調ふる助けとなることもあり。水流自然の美また、人心を樂しましむべし。其の効用、擧げて言ふべからず。

第十七課　全國大競漕會

競漕概況

もはや、新聞紙上にて、御承知のことゝは存じ候へども、昨日、當琵琶湖にて催され候全國大競漕會の概況、御報導申上候。　見物の爲めに、諸國より來集いたし候人々、無慮數千人に及び、雜沓の甚しさ、當地未聞との事に候ひしが、當日の景氣は、又、一段に候ひき。　殊に、競漕に關係ある人々は、多年の修練を現すべき機會到來と言はぬばかりに勇み立ちて見え候。　その組々は、海軍兵學校、海軍機關學校、商船學校、商業學校、高等學校、帝國大學、及び、滋賀縣、京都府、大阪府等の各中學校、師範學校、その他、私立學校、及び、會社銀行員の選手等にて、近頃、勇ましき、花々しき見物にて候ひき。　それにつけても、貴兄と觀覽を共にせざりしことを、甚だ遺憾に存じ候。　別紙記事は、昨夜、興に乘じて、筆を

走らせ候もの、丈は拙く候へども、日擊のまゝに候へば、御一讀下されたく候。匆々。

大津にて　武雄

第十八課　全國大競漕會の記

待ち設けられし全國大競漕會の當日は來りぬ。曉起して、湖畔に向へば、星影、竹生島の上に輝きて、湖面、尚ほ、おぼろげなり。やゝありて、旭さし昇る頃となれば、數萬の見物人、陸續として、集まり來る。

番組は成りぬ。各校の選手は、紅、白、青、黄、紫、黑等に色分けせる帽子を戴きて、おのおのその校旗の下につどふ。

午前八時、號砲、轟然として響く。第一回競漕の組々、おの〳〵その艇に上る。紅、紫、青、黄の艇旗は、相並んで、朝風に飜り、八列の櫂は、筏の如く、水上に浮べり。

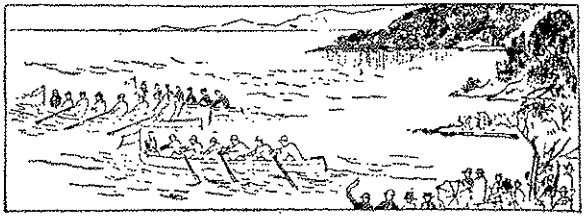
やがて、一發の銃聲と共に、櫂は、水煙を揚げて、一齊に、水に入る。一上、一下、調を亂さ

挺　瞬時　斜方形　舵手　握

ず、四艇、悉く競ひ進む。既にして、紅旗、稍〻、列を挺くと見るまに、青旗、これを追うて、列を挺く。忽ちにして、一艇追ひすがり、四隻、瞬時に、斜方形をなす。忽ちにして、左の方の一艇、舵手のかけ聲と共に、矢の如く突進す。四艇は、見る〳〵變じて、矢の羽の形をなしぬ。

陸上の群集、汗を握り、息を呑んで、見物す。決勝點は、三艇身のうちに迫れり。紅旗と白旗とは、恰も、相並んで進めり、先後なし。

休憩



既にして、一艇身となる。白旗の艇、電の如く漕ぎぬけ、眞先に到着す。紅旗に先だつこと、僅かに三尺餘なり。見物人の喝采、天地を動かす。

つゞいて、第二番の競漕始まりぬ。第三番、第四番、第五番、之れに次ぐ。正午に、暫く休憩し、午後、第六番の競漕を始む。第六番は、前五番に於ける優勝艇

技倆　舳

の選手競走にして、又、最後の競漕なり。この勝負によりて、全國短艇會は、技倆の等級を定むる筈なれば、各艇の漕手等、皆、全力を盡さんと期す。競漕の激烈なるべきは、豫め察せられたり。

午後一時、號砲、水上に轟けば、五艇、舳を揃へて、突進す。暫くにして、おの〳〵、前後を生じ、後になり、先になり、追ひつ、追はれつして、進む。既にして、一艇、波を蹴って、列を挺く。一艇、又た、急に、これを追ふ。第一着は、海軍兵學校の名譽となり、第一高等學校は、二艇身を後れて、第二着となりぬ。

壯快なる軍樂、式場の一方に起こり、紀念優勝旗は、海軍兵學校の選手に授けられき。大競漕會は、こゝに、終りを告げ、數萬の群集、おもひ〳〵に、歸途に着きぬ。數分時の後には、琵琶湖畔、寂として、人影なく、風雨の過ぎたる後の如し。

第十九課　蚊

翅　下顎　鋸

夏ノタ、椽側ナドニ出デテ、涼ミ居レバ、何處ヨリトモナク、多クノ蚊飛ビ來リテ、手ニモ、頭ニモトマリテ、血ヲ吸フ。試ニ、之レヲ捕ヘテ、檢セヨ。

蚊ニハ、二枚ノ翅アリテ、飛ブコト速シ、口ノ構造ハ、殊ニ珍シ。下顎ハ、長クツキ出デテ、二本ノ棒ノ形ヲナシ、鋸ノ如キ齒形アリ。下唇ハ、針ノ如キ、細キ管トナレリ。此ノ二本ノ棒ニテ、人又ハ他ノ動物ノ皮膚ヲ刺シ、下唇ヲ、ソノ傷口ニ挿入シテ、血液ヲ吸ヒ、毒

蛰　痒　飛翔　溜水

液ヲ注ギ込ミテ、飛ビ去ル。蚊ニサレシアトノ痒ク痛キハ、是レガ爲メナリ。

蚊ノ活發ニ飛翔スル時期ハ、二三週間ニ過ギズ。卵ヲ生メバ、死スルナリ。卵ハ、溜水ノ中ノ木片、枯葉ナドニ產ミツクルヲ例トス。其ノ數五十箇ヨリ、百五十箇ニ及ブ。卵ハ、顯微鏡ニテ視レバ、蜂ノ巢ノ碎片ノ如シ。暫時ニシテ、カヘリテ、蟲トナル。其ノ、水中ニ動クサマ、棒ヲフルニ似タルユヱニヤ、ぼーふりト名ヅク。捕ヘテ、金魚ニ與フ

ルモノ、是レナリ。

ぼーふりニハ、翅モナク、脚モナシ。ソノ形、小サキ釘ニ似タリ。常ニ、其ノ體ヲ倒マニスルハ、體ノ末端ニ、呼吸管アルヲ以テナリ。水動搖スルトキ、驚キテ、其ノ底ニ沈ミ、暫クシテ、又浮ブモ、呼吸セン爲メナリ。數日ヲ經テ、ぼーふりノ長サ、凡ソ三分程トナル。ヤガテ、背部裂ケテ、脱ケガヘリ、小サキ米粒ノ如キ形トナル。コレヲ、俗ニ、まるぼーふりト云フ。後チ、數日ニシテ、再ビ脱ケガヘルトキハ、頭部、胸部、腹部等、全ク具ハリ、翅モ生ジ、脚モ生ジテ、コヽニ、始メテ、蚊トナルナリ。

水中ニ生レテ、水中ニ育チシ動物、是ニ至リテ、水面ヲ離ルレバ、忽然トシテ、水ヲ恐ルル一種ノ動物ト變ズ。變化ノ順序、面白カラズヤ。

厭　※　※　厭忌　※　琴　※　※

蚊ハ、厭フベキ蟲ナレドモ、ぼーふりハ、人ニ裨益ス。其ノ、汚キ溜水ノ中ニアル間ハ、腐敗セル有機物ヲ取リテ食シ、有毒ナル瓦斯ノ發生ヲ防グ。物ハ、一害アレバトテ、カロ〳〵シク厭忌スベカラザルナリ。

第二十課　自然の音樂

聲の調子に、一定の高低ありて、節面白く鳴り響くを、音樂といふ。琴、笛、三味線、ピヤノ、オルガン、唱歌などの音曲は、通例謂ふ所

胡弓

の音樂なり。されど、かゝる人爲の音樂の外に、自然の音樂とも謂ふべきものあり。鶯、雲雀、松虫の聲など、是れなり。其の他、心を留めて、萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に、美しきしらべはあるなり。

鷄も歌ひ、烏も鳴く、雀、雲雀、山がら、など、百鳥の聲、皆、音樂なり。鶯の、高き天に歌ひ、鳩の、低き梢に鳴く、是れもまた、音樂なり。或鳥の音は笛の如く、或者は、琴の如く、或者は、胡弓の如し。

笙 ※

ひぐらしの聲に、夕日沈めは、松虫、鈴虫、機織、こほろぎなど鳴き出づ。　或は、金の板を叩くがごとく、或は、銀の鈴を振るが如し。　蛙、蟬、蜂など、皆、それ〴〵に、樂を奏す。　草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も、各〻その音色を異にす。　或は、琴の如く、或は笙の如く、或は、ひちりきの如し。

水の音樂は、更に面白し。　泉の水の湧き出づる音は、琴、尺八、ビヤノの曲とも聞くべく、落葉をくゞる細き流の聲は、琵琶、月琴の調べにも似たり。　軒の雨垂れを、豆太鼓の音に喩ふれば、瀑布の、どう〳〵と落つるは大太鼓の響にも喩ふべし。　彼の大海の波の音の、物すごく、勇ましきに至りては、喩へんに、物なし。

第二十一課　辻音曲

辻
夾老婆

往來しげき、外國の都の或辻に、あさましく痩せたる一人の老婆ありけり。　半ば損じたる樂器を抱きて、音曲を奏しつゝ、往き

きの人に、恵みを請へり。わさも拙く、聲もふるひて、聞き苦しければ、足を止むる者もなし。朝より、夕方まで、同じ處に居て、彈きけれど、いくらの錢をも得ず、歌ふ聲も、いつしかに、かれ〴〵となりぬ。

或名高き音樂師、此の體を見て、あはれを催し、身分こそかはれ、彼れも、我れも、同じく音樂にて、世を渡る身なれば、因緣は淺からず。いでや、老婆の爲めに、慈善を行はんとて、老婆のそばに立ち寄り、わけを語りて、其の樂器を取りあげ、徐ろに彈き始めけり。

名人の手にかゝりては、損じたる樂器も、忽ち、金玉の響きをなしぬ。古語にいへる如く、げに、魚も聽き、鳥も悅ぶか、と思ふばかりなりしかば、往來の男女驚き感じて、立ちとゞまり、やがて、人垣を築きけり。

人垣

餘韻
拍手

さて、餘韻長く、四方に響きて、面白き一曲終りければ、群集の拍手は、鳴りもやまず、求めざれども、錢を投ずること、雨の如し。音樂師は、衆人に一禮し、いつこともなく去りぬ。老婆が身邊には、銅貨、銀貨うつたかくなれりき。

第二十二課　丁汝昌（ティンジョーチャン）

夙に、米國に遊びて、海軍術を修め、歸りて後ち、清國海軍の要務にたづさはりし、支那近代の名士丁汝昌は、日清戰爭の際、自殺して、部下の將士を助け、美名を、世に知られたり。

督戰

汝昌は、嘗て、我が國にも來りて、朝野の諸名士と交り、取りわけて、今の我が海軍大將伊東祐亨と親しかりき。然るに、幾程もなくして、日清戰爭起こり、汝昌は、北洋艦隊の提督となり、祐亨は、我が海軍の司令長官となり、きのふの友は、けふの敵となりけり。

支那の軍の、海陸ともに連戰連敗するに

及びて、伊東司令長官は、舊交をおもふの餘り、空しく、良將を失はんことを惜み、怨に、忠告の書を寄せて事の平くまで、暫く、我が國に來遊せんことをすゝめけり。されども、丁汝昌は、職責を重じて、應ぜざりき。

さる程に、支那の艦隊は、日を逐うて、勢力挫折し、命の綱と頼みし定遠以下の軍艦も、或は、撃ち沈められ、或は、水雷に碎かれて、將士多く斃れければ、汝昌は、かうと覺悟をきはめ、使を、伊東大將におくりて、我れ、降るべ

※ 挫折

ければ、殘る將士を赦されたし、と請ひぬ。

時しも、明治二十八年二月十二日、霜深き夜の半ばなりき。星光微かに輝きて、水天蒼茫たり。汝昌は、四五人の將士を、鎮遠艦の甲板に集めて、訣別の宴を開き、且つ、其の意衷を告げて曰はく、我れ、國命を奉じて、海軍を率ゐたれども、運拙くして、連敗、こゝに至りしは、遺憾至極なり。夫

※ 餞別宴　訣別宴　意衷

慨然　絃

れ、武人の本意は、斃れて後ち已むにあれども、我が國の前途の多事なるを思へば、徒らに、有爲の將士を失ふべきにあらず。今や、このまゝに降らずば、早晩、虜にせらるべし。我れ、若し、艦隊を率ゐて、降を請ひ、一身を殺して、部下を救はゞ、如何。是れ、國家の爲めにあらずや。人々、願はくは、我が意を察し、暫く屈して、他日の長計をなせ。」と、言ひ了りて、慨然たり。將士は、皆、首を垂れて、一語なし。艦上、寂として、絃をたゝく波の音のみぞ高かりける。

其の夜の明けがた、汝昌は、船室に歸り、毒を服して、死にけり。定遠艦長以下數名また、共に死にき。

第二十三課　潮の干滿

海の水の、時刻を定めて、進み昇りたるを、滿潮といひ、退き降りたるを、干潮といふ。おゝよそ六時間毎に昇降す。是れ、月と太陽との引力の然らしむるなり。

背　※

凡て、物體には、引力といふものありて、相吸引す。　引力は、大なる物體ほど強きを例とすれども、又、距離の近きと、遠きとによりて、その力を増減す。　太陽は、月よりも、遙かに大なれども、地球を距ること、甚だ遠ければ、其の引力微弱なり。　故に、潮汐は、重に、月の引力に因りて、生ず。

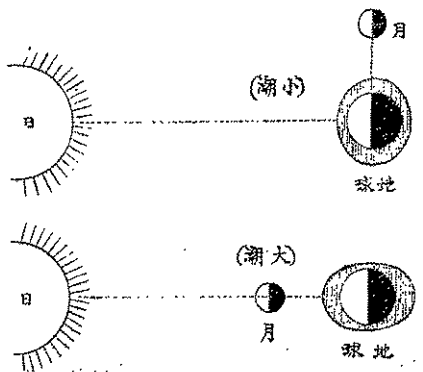
地球を二分して、假に、左と右との兩半球となさば、左半球の海洋が、月に向へる時は、右半球は、月に背くべし。　さて、月に向へる

※　※　潮汐　水嵩

側の海水は、月の引力に引き付けらるゝこと強かるべきが故に、其の水面、自ら高まるべく、反對の側の水は、地球の實躰よりも、その引き付けらるゝこと弱きを以て、こゝにも、亦た、水面の高まるを見るべし。　是れ、左右兩半球面に於て、同時に、潮汐の現象を呈する所以なり。

蓋し、月、東より出でて、西に進み、次第に、頭上に近づくや、其の引力、漸く強大となり、海水は、爲めに、引き付けられて、暫時、水嵩を増し、

我等の居處と、月と、正しく向ひあふに至りて、最も高まり、所謂滿潮となる。而して、月の傾くにつれて、次第に引き去られ、月が、我等の側面に至るに及びて、かなたは、滿潮となり、こなたは、干潮となる。月、更に進みて、地球の他の面に相向ふに及べば、こゝにまた、滿潮を生ず。



要するに、地球面の、ありとある場處は、各、二十四時四十八分毎に、月に對して、同一の位置を占むる筈なり。是れ、各場處に、一晝夜、凡そ二回の潮汐ある所以なり。

前にも言へるが如く、太陽は、地球を距つること、甚だ遠き故に、其の海水に及ぼす引力弱し。隨うて、月の潮汐と、太陽の潮汐とを比較すれば、九と四との割合なり。然るに、時としては、太陽の引力と、月の引力と、一線に、相會する事あり。この際には、潮勢、殊

に大なり、之れを、大潮と云ふ。　之れに反して、太陽と月とが、地球に對して、直角をなすときは、潮の高まること、殊に低し、之れを、小潮といふ。

潮の昇降は、大洋の中央にては、目にも立たねど、岸に近づくに隨ひ、陸地の影響をうけて、著くなり、漏斗狀をなせる港灣にては、最も甚し。　北亞米利加のファンヂー灣にては、殆ど、七十尺も高く昇る、といふ。

第二十四課　食　鹽

むかし、家康、老女某に向ひて、「天下の食品のうちにて、最も旨きものは、何ぞ。」と問ひしに、老女、「鹽なり。」と答へしかば、「然らば、最もまづきは、」と、再び問ひしに、又、「鹽なり。」と答へき、とか。　げに、鹽ほど旨きものはあらじ。　大抵の食品は、鹽の味をかりて、始めて、よき味を生ずるなり。　さりとて、鹽は、鹹ければ、それのみを、多く食ふことは、難し。

鹽は、人體の主要なる成分を成すと共に、

其の作用もまた、いろ〳〵なり。食慾を促し、滋養分の吸收を活發ならしむるも、鹽なり。蛋白質を溶解して、血液の循環を盛んならしむるも、鹽なり。鹽は、眞に、缺くべからざる食物なり。

米、麥、牛肉、の類は、或は、全く食はずとも、他に、滋養の道だにあらば、生を保つに妨げなかるべし。鹽に至りては、然らず。全く、鹽を食せざらんか、身體、次第に衰弱して、遂には、生命を失ふに至らん。されど、また、鹽は、身體組織の主要分たる蛋白質を溶解するの作用を有す、故に、餘りに、鹽分を過食すれば、是れまた、身體の發達を妨げ、其の營養を害し、且つ、病等を釀すべし。愼まざるべからざるなり。

人の、鹽を用ふる量は、實に大なり。國によりて、多少の差はあれど、英國人、一人一年間の量は、四貫八百目に及ぶ、といふ。日本人も、略〻之れにひとし。全世界の人の使用高は、いかばかりならん。

かばかり多くの鹽は、何處より產するかといふに、大抵は、海の水より製す、海の水は、多く、鹽分を含むが故なり。海は、地球上の四分の三を占むる程の大きさなれば、世界中の人が、如何に多く、鹽を食すとも、其の製造の不足することはなし。

國語讀本 高等小學校用 卷五終

明治三十三年九月廿九日印刷
明治三十三年十月二日發行
明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷
明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

(國語讀本高等輿附)

卷ノ一 定價 金拾八錢	卷ノ五 定價 金廿二錢		
卷ノ二 定價 金拾八錢	卷ノ六 定價 金廿三錢		
卷ノ三 定價 金弐拾錢	卷ノ七 定價 金廿三錢		
卷ノ四 定價 金廿二錢	卷ノ八 定價 金廿四錢		

著作者 坪內雄藏

發行者 東京市神田區裏神保町九番地 合資會社富山房

代表者 合資會社富山房社長 坂本嘉治馬

印刷者 東京日本橋區藥研堀町三十三番地 仁科衞

印刷所 岡所厚信舍 (電話浪花一四六番)

發兌元 (明治廿九年六月設立) 合資會社富山房 長距離電話本局加入(一〇三六番) 電報略號 ヤマフ

不許複製